



学校だより

7・8月号

令和4年6月30日発行
横浜市立磯子小学校

えがお かがやき 磯子小

「見えない学力」を豊かに

校長 宮島 章

4月にスタートした令和4年度も3か月が過ぎ、早いものでもう7月になります。7月の後半からは、子どもたちが待ちに待った夏休みも始まります。子どもたちは学校を離れ、各ご家庭や地域の中で過ごすこととなりますが、この長期の休みでは普段学校ではできないような経験ができることを願っています。

だいぶ昔になりますが、私が教員になって間もないころ「見える学力、見えない学力」という本を読んだことがあります。この本では学力全体を氷山に例え、海上から見えている部分を「見える学力」、そして海中に沈んでいて見えないものの、海上部分より圧倒的に大きな海中部分を「見えない学力」と呼んでいます。「見える学力」は、知識や技能などいわゆるテストなどでわかるもの、「見えない学力」は、通常のテストでは判断しにくいもので、氷山のように「見える学力」はこの「見えない学力」という土台の上に成り立っています。したがって「見える学力」を伸ばすためにはそれを支えている「見えない学力」を豊かにすることが大切といった内容が書かれていました。

学力をどのように捉えるかによっても、この説には賛否両論あることと思いますが、なるほどと思える点もあるのではないかと思います。この本では「見えない学力」の部分を、家庭での生活習慣・しつけ・遊び・読書・会話と捉えています。個人的にはもう少し広く、例えば、人の話をしっかりと聞くことのできる力や、様々な事柄からいろいろなことを感じ取れる力等も含めてもよいのではないかと思います。そしてこのような力は、単なるトレーニングを繰り返すことで単純に身に付くものではなく、人や社会、自然、芸術などとの種々の出会いから豊かに身に付いていくものではないかと思います。

学校においても、言語能力の育成や体験活動を重視した教育活動を進めておりますが、当然のことながら学校だけで十分というわけにはいきません。コロナウイルスの感染状況も以前に比べれば少し落ち着いてきていますので、ぜひ夏休みという貴重な時間を使って、音楽会に行ってみる、美術館に行ってみる、博物館に行ってみる、海や山でのアウトドア体験をする、地域の行事や活動に参加する、ボランティア活動に参加する等々、普段はなかなかやろうと思ってもできないことに、まずはほんの少し時間を使ってみてはいかがでしょうか。

そしてこのような様々な出会いを経験する中で、子どもたちの「見えない学力」は、さらに豊かに育まれ、創造的な発想や思考の源になっていくことと思います。もちろん知識的な理解はとても大切なことですが、知識を単なる知識として終わらせず、知識を知恵として活用できる力の源も「見えない学力」にあるのではないかと思います。